『室伏鴻集成』河出書房新社、二〇一八年

二七〇頁
「舞踏について話し出すと人生論になりがちだ」と誰かが言っていた。それは踊りが手仕事を越えて、「肉体労働」であるからだろう。そして舞踏は労働を、肉体まるごと越えようとする……。
　どこへ向かってと問えば、それはたしかに人生論かもしれない。「働かぬ者食うべからず」だから。ところが舞踏のリミットには「働かぬモノに成ること」や「モノの生命や流動との交通」があるから。」

一九三、一九五頁
〈Living Dead〉「生きている死者」
Form にとどまっても、Form の崩れゆきに身を浸しても、すなわち、unformal な無定形の流れについても、いずれにせよ、それは living dead ではないか。死を生きることではないか。
〔……〕
まるで、われわれ自身のそれぞれの墓地をひらき、掘りすすむ、その一挙手一投足が、死を通じて、死との交換によって光り輝く、闇の中からわれわれの輝ける胎児、もうひとつの生を発掘するが如く。
〔……〕
われわれは崩れる。われわれは、崩れるもののなかに生まれる。そして、その逆。生まれつつあるもののなかに死んでゆく。ダンスについて言うのは難しい。が、それはすでに言われた。〈生きている死、Living dead〉であると。

二七一頁
崩壊とともに立ちあがるもの、立ちあがりながら崩折れてゆくもの／危機、それが舞踏である。〔……〕
男たちが　ただ崩れる／熱い息とともに　崩れおちる
崩れ落ち　骨を打つ／ただそれだけ」
九九頁
「かたちは　崩折れる
すべてのかたちは、その崩れの只中であらわになる。

二一六頁
（カオス）
踊るものたちは、鉱物性の花になり、そして落魄し、長い冬の沈黙、厳しい凍るような眠りを眠りつづける。大地の養分からも、太陽の輝やける陽光からも遠ざけられたまま、死霊たちの国から回帰することもなく――彼らはどこへ向かったのだろう。

一四七頁
コスモスとカオス、秩序と混沌というのは、形式とその外に対応するだろうか。そしてそれは、二元の対立項のように読まれるのではなく、秩序に命をそそぎこむものこそ混沌であり、混沌に形を与えるものこそ秩序であるとすれば、形式とその外は、とりあえず、共にあるものだといえる。
では、次に、その境界とは……いつでも、ご承知のように Transit 状だ。Transit とは、移行する形態だ。その常態は、ひとつの／あるいは無数の、激動する事態、変容する事態によっているだろう。
それは、運動するものだ。
そしてそれは、事、である。
出来事である。
〈カオス・モス〉といった事態！
未だ、形式の定まらぬ、それゆえ未だ名の定まらぬもの、移りゆく状態にあるものの、その運動性によって、われわれの生は、現実と超現実の流動を生きて来た。

二九〇頁
私の身体技法のなかに、筋肉・骨・皮を硬直させ、バラバラに解体してしまう、あるいは全身を極限まで硬直させたところで一気に弛緩させる、内部と外部に隔てられた皮膚感覚をメビウスのように還流させ反転させてしまう、というようなものがあるが、毒薬の致死量や、絶対的な速度はいつものんでみないとわからない……一回のみの永遠？

あらゆる形態への嫌悪があって、それは何か？　むしろそれは愛着ではないか——愛着が嫌悪とない交ぜの攻めぎ合い、形態と非形態の間にあって揺らいでいるもの。コトバやカタチになる手前で、すでになにか他のものであるもの。すでにいつも生きられ、交流されている「無為」というようなものにとどけば、と思いつつ踊るのでしょうか。

二九一頁
聖なるものから切り離たれた聖なるものについて考えていた。間チガイや気チガイや擦れチガイについて。あるいは、不具性、片手落ちというようなものの権利に身をよせるようにして踊ってきた。なにか充全に報償されたもの、補償されたものに対しては、いつも懐疑的であった。
たとえば、そこでは音楽にのせて充全に踏まれるステップは、崩折れる。共同的陶酔の輪舞の輪は、千切れる。そこからはぐれて、傾いた斜角で、ヒトともケモノともつかぬ美貌になって跛行しているダンスがあるのだ。
クリナーメン、よじれる、いつも外れ、別の線上へと偶発するように斜交すること、衝突すること、混成すること。